

No.22 September 1996

フェミニズム・宗教・平和の会の10年



Womanpower



フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

「フェミニズム・宗教・平和の会」の一〇年	奥田	3
青葉の季節に女性の宗教性と歴史から学ぶこと	掛川	5
宗教的なるもの	真鍋	7
日本人は、日本教徒？	糸川	8
差別を考える	西山	10
雑感	小松	11
クリスチャンホームに育って―私の場合	飯田	12
「宗教本能」について	鶴岡	13
私の入信体験	佐々倉	18
私は思う。この頃。いつも	千葉	28
人間への目ざめ	中村	30
フェミニズムと協同組合運動（生協）	金子	32
美しい精円・夫婦別姓	新井	35
幼ママなんて大キライ（上）	岡村	39
編集後記	岡村	43
	悦子	
	精子	
	珠理	
	れい子	
	聡子	
	加代子	
	智子	
	瑛子	
	靖子	
	穂子	
	優子	
	祐子	
	典子	
	暁子	

表紙台字 松尾紀子／シンボルマークは「壺」を表す象形文字です。

「フェミニズム・宗教・

平和の会」の一〇年

奥田 暁子

一九八六年一月に発足した私たちの会は今年一〇周年を迎えた。六月にはそれを記念してシンポジウムを持ち、大勢の参加者があった（シンポジウムの報告書は現在作成中）。私たちはこれまで年に二回 *Woman's Spirit* を発行し、三ヶ月に一度例会を持つだけの、とても活発とは言えない活動を続けてきたのだが、シンポジウムの際には何人もの方から一〇年間続けることは大変なこと、これからもがんばって欲しいと励まされ、次の一〇年に向けて、また歩きだそうという気持ちになっっている。

会の歩みについては設立以来のメンバーの方々はよくご存知だと思うが、最近新しい会員の方々も増えたので、この会の発足の事情やその後の経過などを簡単に紹介しておきたい。

この会はフェミニスト神学の視点に立って、既成の宗教やこの国の精神風土を批判的に見直したいという点で一致した人びとが設立メンバーとなって、発足し

た。当初は関東と関西に二つの拠点をもち、集会や冊子の編集・発行などを交互にすることになっていた。その後、関西の中心メンバーであった大越さんや源さんが脱会され、独自の活動を始められることになったため、会を関東に一本化することにし（その時点で関東の有志メンバーが継続か解散かを討論して結論を出した。その経緯については *Womanspirit* 十一号を参照）、現在に至っている。

会の名称に「平和」という言葉を入れたのは、単に学習・研究のレベルに留まらずに、解放の神学者たちが目指しているように、実践（プラクシス）と思考・考察（リフレクシオン）の両方を大切にしたいと考えたからである。しかし、これまで私たちはとくに行動らしい行動はしてこなかった。「フェミニズム」と「宗教批判」という共通項があるとはいえ、フェミニズムについても宗教批判についても解釈は多様であるし、会員ひとりひとりの政治的な立場も必ずしも同じではない。たとえば、本誌でもかつて問題になったが、戦争・戦後責任の受けとめ方は、人によって大きく違う。それについて誌上で討論し、批判し合うことは可能だし、大いにやった方がいいと思うが、外に向かつて統一した行動をとるとなると、意見の一致を見ることは難しいだろう。そんなわけで、思想を表明しなけ

ればならない政治的な行動については、会としての統一行動はとらず、それぞれが個人として関わるという姿勢をとってきた。

しかし、八月一七日のNHKテレビにおけるK・V・ウォルフレンの発言を聞いて考えさせられた。これは日本で市民社会が機能しない原因を探る討論番組であったが、野田正彰や橋爪大三郎が自我の確立の重要性や知識人の役割を強調したのに対して、ウォルフレンはそういうことを言っているだけでは駄目で、今は政府や官僚をコントロールするために行動することが何よりも大切なのだと言っていたのが印象的であった。彼はその一例として川田正子さん（H・V訴訟原告の川田龍平君のおかあさん）の行動を挙げていた。昨年の冬以来わたしもこの訴訟を支援するために厚生省前の座りこみをはじめ、何度も集会に参加しているが、なんの力も持たない無名の市民が社会的公正の実現だけを求めて闘ってきて（もちろん、大きな犠牲を払ったのであるが）、ついに厚生省や製薬会社に謝罪させることになったプロセスは感動的であった。大げさに言えば、この国にもやっと民主主義を基盤とする市民社会が到来したという感慨をもった。

率直に言って、私たちはこのような意味での行動をしてこなかった。もちろん、この会は運動体ではない

し、行動の形態も多様であっていいと思うが、会として「平和」の部分が弱かったことは否めない。

さて、一〇年を振り返って、私たちの当初の目標はいくぶんかでも達成されたのだろうか。この一〇年間にフェミニズムの視点からの宗教批判は浸透したのか、と問うならば、その答は否定的にならざるを得ない。たしかに一〇年前に比べれば、この視点に立って書かれた本は多くなつた。同じ視点を持つ研究者も増えた。キリスト教に関して言えば、フェミニスト神学に関心を持つ人の層は広がり、あちこちの教会でその種の集會や学習会も開かれるようになった。しかし、圧倒的多数の人びとはまだ、「フェミニスト神学」という言葉さえ知らないし、聖書批判などんでもないと考えている。仏教の場合にもつと少数派なのではないだろうか。

そして宗教批判の対象は宗教だけに限定されない。必然的にそれらの宗教を存続させている人びとの意識や精神の領域にも踏み込むことになるだろう。たとえ一部の政治家や一部の市民の「従軍慰安婦」問題に対する発言にみられるような、未だに時代錯誤の非常識な言説がまかり通っている現実をきちんと批判することも重要である。そのためにも、私たちはもつともつと思想を鍛える必要があるだろう。この会がそのよ

うな場になることを願っている。

青葉の季節に女性の宗教性と 歴史から学ぶこと

掛川典子

青葉の美しい六月の半ばに大雄山最乗寺に行く機会を得た。苦しんで山門までたどり着くということもなくなつた今日、登りの参道も整備されて青色のさわやかな紫陽花が続き、バスや乗用車が舗装道路を上って行く。樹齢何年か見当もつかない杉の大樹に見下ろされながら、うっかりすると躓きそうな敷石を踏んで本堂の方へ向かって行くと、奥の院までの伽藍配置も興味深く、なかなか結構な曹洞宗の寺である。予備知識なしに「宝物殿」という表示に誘われてそこに入ってみたところ、三枚の地獄絵に魅せられて思いがけず時間を費やした。「江戸初期作者不詳」と説明書きにあったものの、そう古いものではなく素人の僧が描いたという。女性だけの血の池地獄も明確に描かれていた

し（日本の血盆経の発祥の寺は曹洞宗といわれている）、亡者たちのなかでも胡粉を厚めに塗り表現された女性たちがとりわけ美しく哀れに印象深かった。芥川龍之介の『地獄変』を連想させる真ん中の一枚は、燃え盛る屋敷と女性を乗せた御所車の放つ火炎のはるか上に、亡者がまるで降る雪のように堕ちてくる不思議な静謐さに満ちていた。しばらくこの絵のことで八十歳に近しいというその寺人と話をした。

「地獄絵に描かれているハ割は女性です」と彼は繰り返した。御堂に行くと、「特別祈願の方ですか」と質問され、改めて周りを見ると、数人の女性が目にとまった。不動堂でも蠟燭を灯して祈っているのは二人の女性であった。個人での祈願はやはり女性が多いのではないだろうか。男性の祈願ということを考えてみると、さきほどの「宝物殿」の展示品の中には、三葉葵の漆箱に納められた松平家の文書も、明治元年の有栖川宮の特別祈願文もあった。現代では会社単位で毎年社内での安全祈願をするところもあるという。またしても、女性は私、男性は公か。

少なくとも、妊娠・出産・育児・教育・家事・身障者介護・負傷者や病人や老人の介護・死者たちの供養といったケア役割に実際に当たり、かつその責を担わされているのが女性である限り、どうしようもない状

況の中で苦しむ者たちのために（自分も苦しいのだが）望む個人的祈願もなくならないだろうと思う。寺人は「住専問題みたって、悪いことをしているのは男性ばかりじゃないですか」と語った。自ら悪をなしながらそれを認めない社会的位置にいる男性と、悪の被害者でありながらそのために起こった悲惨からの救済を祈る女性と。公的世界に生きる男性は悪事を働き、自分の罪でもあるかのように女性がおのれの身に引き受けて祈るのだろうか。これは水子供養と同じ構造である。

私は、人間が人間である以上、未熟さと不完全さから繰り返し悪事は起こるので、この世の悲惨が消えることはなく、宗教の必要性はなくならないと思つてゐる。宗教性に秀でた女性は昔から存在する。しかし女性が宗教性に優れていても、宗教の組織の中では権力は男性が握る。西洋では、宗教性に優れた女性が尊敬され敬意を以て遇された時代があつたが、歴史がくたると、利用されるか、迫害され、魔女として処刑された。歴史から学ぶことをやめてはならないのである。女性は現代でも構造的弱者のままなのだ。宗教組織が権力構造をとる限り、女性は宗教性を吸い上げられてしまう。そしてふたたび家族単位で管理される。一般の女性は構造の中でケア役割を背負い、彼女にまかされたさらなる弱者を管理する……。やはり救済は個

人単位にしかありえないのではないか。

かくしてまたもや私は思う。女性はもつともつと勉強して、批判力を養い、自分の判断で世界にかかわらなければと。宗教心があればこそ組織には同一化できないのだし、独りなればこそ信仰が自分を支えていると。そうしてこのように思っている女性が少なからず存在していることも知っている。それにしてもあの地獄絵は美しかった。修行僧はどのような思いを絵に託したのであろう。

思いみよ火炎燃え立つ地獄絵に

胡粉かさねる修行僧の指

典子

宗教的なるもの

真鍋 祐子

原稿のテーマをいただいたとき、正直言って困ってしまった。世の中の傾向とは裏腹に、最近はあまり宗教現象に関心を持つことがなかったからだ。もともとシャーマニズムや新宗教に関心をもってきた私であるが、ここ三、四年は社会運動の研究に転じていた。とはいっても、「宗教的なるもの」には相変わらず興味がない。とりわけ、韓国の民主化闘争を取り扱っている現在は、人びとを運動へと動機づける「冤魂思想」——実現されない民主化のため、非業の死を遂げざるを得なかった死者への思い——に心をひかれる。具体的には「光州事件」をテーマとし、事件から一五年も経たうでの今回の処断（全斗煥、盧泰愚という二人の前職大統領に対する逮捕および求刑）が意味するもの、また、光州で起こっている巡礼現象や、韓国の運動家たちにおける「光州」の象徴性について、さまざまに思いをめぐらすこの頃だ。そこに参画するのは必ずしも、文字通りの「宗教」に関わっている人びととは限らない。だが彼らのそうした行為を方向づけ

ているのはきわめて「宗教的な」要因、すなわち死生観に他ならない。

宗教を、目に見える宗教的な現象や教団という社会集団の単位で捉えるのではなく、このように人びとの行為を方向づけたり、時には喜怒哀楽といった感情の源泉ともなる「エトス」として考えることが、このところの私の関心事項なのである。韓国についてわずかなことを知っているに過ぎないので、偉そうなことは言えないけれど、たとえば戦争責任について基本的人權の観点から謝罪するのは結構だが、もっと他国の文化的な脈絡に基づいた「死者への思い」が必要なのではないかと思う。それは同時に、真に問われるべき罪とそうでない部分とを弁別し、過度なまでの「歴史への断罪」という、現代日本人たちの傲慢を避けることにもなるだろう。韓国に関して言えば、非業の死者に對して寄せられる生者たちの悲しみや怒り、おそれの感情を勘案することなく、生半可な独善ばかりが横行する昨今の風潮に、いい加減うんざりしている。本当の謝罪と、それでいながら歴史に對する傲慢に陥らないこと・・・それが「宗教的なるもの」をめぐる研究の意義として、現在の自分に与えられた使命であると、恥ずかしながら思っている。このことについては機会と時間的な余裕があれば、改めて整理してみたい。

日本人は、日本教徒？

糸川 優

この頃、日本人は、実は、もれなく日本教徒なのではないか、ということを考えています。日本人は、宗教の有無や相違よりも、国民性に、あまりにも強い影響を受けて、誰も皆あまりにも違わないという意味です。発端は身近にいる外国人との関係からでした。

私自身は、プロテスタントの福音派（額面通りに、聖書を生きる神の言葉と信じ、従おうという群れですが、ファンダメンタリストではありません）の信仰を持っていて、仕事上は、アジアを中心とする外国人と触れあうことが多くあります。中国、台湾、韓国、マレーシア、インドネシア、フィリピン、アメリカ・・・と、いろいろな人がいる中で、マレーシアやインドネシアの人からは、日常生活から、ひとつひとつのものと考え方までイスラム教徒、日本人とは全く違って神を畏れる敬虔な人達、という印象を受けます。とても異質で強烈な印象です。都会の人であれ、田舎の出身であれ、あらゆる出自の違いを超えて、イスラムということが強く感じられるのです。

考え方や嗜好を決定するのには、さまざまな要因があるでしょう。けれども、私がキリスト教徒である以上、私にとつては、日本人の非キリスト者よりは、外国人でもキリスト者の方が、親密に感じられるはずで、また、同じキリスト者なら、さらに同じ福音派のキリスト者なら、共有できるものが多いはずで、でも現実には、少なくとも、私自身にとつては、信仰が異なることよりも、生業をも含めたその人の生活環境の相違の方が違和感を感じるものようです。で、これは、単に、なぜ、この人とはあうのに、こっちの人とは、話があわないのか？という程度のことです。私は、キリスト者です。私は、常に、自分自身が神に忠実に従うものでありたいと願っています。私は、キリスト者だと、自認しているし、また、公言もします。それなのに、地方都市へ来てみてみれば、キリスト者同士であるよりも、例えば、東京出身であるという生活の感覚が近い人の方が、話がしやすいという具合です。信ずるものが違っても、生育環境の似た者との方に近しさを感じるのです。同じ日本人同士、あるいは、同じ出身の者同士、共通のものを持つのは、当たり前前といえ、当たり前前、でも、本当にそれでいいのだからか、という疑問を持ちます。

私の信仰とは、どのようなものなのでしょうか？私

の信仰は、私らしさを形作るのにどのような影響があるのでしょうか？私の行動様式は、信仰に基づいたものとなっていないのでしょうか。星占いでも風水でも、何でもかんでも信じているような行動をとりながら、何も信じていない、大多数の人達の他に、日本にだって仏教者も、キリスト者も、他の宗教を持つ人もいるはずです。ところが、どうも、日本人は、日本人です。日本人という粹をはずれることができない、というように感じられるのです。よく知られた皮袋のたとえがあります。「人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、皮袋は裂けて、ぶどう酒が流れ出てしまい、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れれば、両方とも保ちます。」（マタイ9・17）そして、「新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ」（コロサイ2・10）たつもりになってはいても、どうも古い皮袋を慕っています。古い皮袋が捨てきれない自分があります。実は、ぶどう酒は新しくならないのではないのでしょうか？そうでなければ、キリスト者の私は、隣の非キリスト者とは、その考えも、規範も行動様式も全く違ったものであるはずなのです。隣の非キリスト者よりも、外国人のキリスト者の方と等質であるはず

なので。

自分自身の信仰への疑問を書いてみました。一部を除く、ほとんどの日本人宗教者は、やはり宗教の違いよりも、日本色というものでくることができるとに思っています。日本教徒です。私たちはみな、日本教に冒されているのかもしれない。でも、ひとつの宗教に帰依して、新しくされた者が、そうではない者と変わりなくていいものなのでしょうか。日本人宗教者もまた、横並びを好む日本人になってしまっているのではないのでしょうか。同じであることは、それほどまでに重要なことなのでしょうか。宗教を持っていることが、異色であるとして弾劾を恐れるあまり、他の人と同じく日本的であることを強調しているのでしょうか。日本という共通項は、宗教の差異を覆ってしまうほど大きなものなのでしょうか。信ずる宗教の違いを際立たせることが、私の目的なのではありません。あまりにも共通な部分に安住してしまい、共通であることにしか価値を見いだせなくなっているような気がしています。同じ顔をして、おすまししているのではなく、宗教者としての違いを確立して、その上で、ようやく共存ということがあるのではないか、と思う今日この頃です。

差別を考える

西山 藤子

人間の差別被差別は根が深い。実に、時代と地域、社会、人種、性別、職業、宗教、思想、階層などさまざまな枠の中で、人間は他者を差別し、他者から差別されることを繰り返して来ました。

差別には個々の人間の意識の集合としてとらえられるものだけでなく、普遍的に存在する差別意識があるのではないか、もしくは差別の根というようなものが本来人間にそなわっているものかなど、思いをめぐらさざるをえません。

生物進化の上では、われわれは遺伝的構成に関する限り生まれながらにして「不平等」であるといわれます。この不平等の情報が個々の生物にもたらすリアクションがその差別の根を生むのであるのかもしれませんが。また、集団中に有害な遺伝子が出現すると、これをもった個体の生存力や妊性がそなわれ、この遺伝子が集団から除外されるという作用があります。これは負の淘汰とか浄化淘汰 (purifying selection) とよばれるもので、個体や主の保存本能からも説明さ

れてくるものです。生物学的なステージでのこの自己保存運動を差別意識の淵源とみることは荒唐かもしれませんが、人間と差別もしくは差別意識は、そのくらい派生的に分かちがたい関係にあるということでしょう。

生物学的なこの差別の構造をもって、現実には有る差別の問題を免責にしようということではないのです。ここではただ、そのくらい、人間にとって差別の根は深いことを認識せねばならないだけです。

これらの差別意識に対しては、部落差別解放運動の形で鋭く集中して問題を顕在化し、意識と事実の双方から糾弾して差別を許すまいとする人々がいます。また、本来両性は平等であるとして女性をもろもろの分野での差別から解放しようという動きも久しいことです。アトランタ五輪のお祭りさわぎの中に、匿された人種差別のにおいを嗅ぎつけ指弾する声もあがっています。

その中で、われわれは仏教者として何が出来るかを問われています。自らの差別性を煩惱と置き換えることで済ますなら、仏教は今後とも問題の如何にかかわらず何事も為し得ないでしょう。そのあまりにも根深いとらわれに暗澹としつつも、如來の知慧に光(て)らされて、自らがどのような共同体の一員なのか、そ

雑感

小松加代子

の共同体はどのような構造をもち、どのような問題をはらんでいるのか、その中で、自分はどうのような位置を占め、また占めねばならないかを明らかにしてゆくことしかないのではないか、それを痛切にいま思わされていきます。

現在ヒーリング（癒し）ブームとも言われ、書店に行けば数多くの関連した出版物を目にすることができず。この流行は、呪術的なものへの関心の高まりであるとか、個人的な内向性を示すものであるなどと言われているが、少なくとも不思議なものへの関心が高いことを示しているように思われます。奇跡といったものが自分の身近で、自分の中でも起こり得るといった感じでしょうか。しかしあまりにも多くの書物が出版され、中には明らかに商売目的のもの、それから首を傾げてしまうものや、なぜこれほどまでに確信が

もてるのだろうかと思うものもあります。ヒーリングは、どの場合でも一定して起こらないこと、起きない場合もあること、そうした状況をどう受け入れるかが問題となるでしょう。

また、前世療法といった輪廻を前提としたヒーリングも現れています。意外と生まれ変わりが大きな抵抗なく受け入れられているのは、実際の日常生活の中でふと感じること（デジャビュ・親近感・不思議な体験など）と一致するからなのでしょう。学生を見ていますと、輪廻も、永遠の生も大きく異なるものとしては考えられていません。むしろ、彼女たちにとって脅威となっているのは、地獄の存在のようです。地獄というものが意外にも恐ろしい存在として無意識的に認められているのが不思議です。こうした地獄への不安がどうして生まれてくるのでしょうか。

臨死体験なども含めて死と死後の世界の問題が話題になっていますが、個人の死ももちろんですが、残された者にとっての死と死後の世界の問題も興味深いものです。まだまだ人間については分からないことばかりですね。

クリスチャンホームに育って

— 私の場合

飯田 智子

わたしはクリスチャンホームに生まれ育った。わたし自身がクリスチャンになったのは、小学校五年生の頃だった。教会の同年輩の友人達が受洗するので、それでは一緒にということ、特別な理由はなかった。目に見えない神様は常に自分の周りに存在しているものと考えており、嬉しいとき、悲しいとき、困ったときお祈りという形で神に語りかけていた。親や兄弟、友人に言えないようなことを話す存在でもあった。普段は忘れていくけれど何かの時には心の支えになっていた。そして「神様がわたしたちを守って下さっている」と考えている。わたしはそういうクリスチャンであった。

そんな自分のあり方に疑問を持ち始めるきっかけとなったのは、半年ほどの外国での生活だった。様々な差別と迫害。国内問題や国家間の問題を真剣に熱く語り話し合い、生命の危険を冒してまでも戦おう（非暴力で）とする人々との出会いを通して、いかに自分の

国のことに対して無関心で、無責任であったかということに気づかされた。自分の生活しているすぐそばにも、生きにくくさせられている人がおり、そういう社会に自分がいるということに気づき始めた。

それでは、なぜ「クリスチャンでありながら」こうした現状に、それまで気づいてこられなかったのか。関心や意識の欠落、神の存在を自分と自分の周囲の人のことだけで完結してしまっていたというわたし自身の反省もさることながら教会の活動が内的となって教会員だけのものになり、教会外の社会とのつながりや広がりを持ちにくくなっているのではないだろうか。そして保守的になる教会が少なくないという現状があるのではないだろうか。

しかし本来キリスト教が目的としたところは、自身が救われるという内向きに働く面もあれば、社会の中で弱くさせられている人がいなくなる、人は神の前に平等になる、その社会を実現するための外向きの面もあるはずである。内と外のベクトルが同時に作用することによってはじめてキリスト教本来の力、エッセンスが出てくるのではないか。

社会を構成する一人の市民として、現状に無意識であつたり黙認することは、自らが加害者となることであり、そこからの解放もなく当然弱者との連帯は生ま

れない、そういうことに気づいた。

植民地化と西欧優位性の道具として用いられ、国家権力と癒着して加害者となったキリスト教の構図は今も残っている。しかし、キリスト教のエッセンスに立ち返って見た時に、その枠の中で現在の社会を見ていくことに意味はあるのではないかと思う。それは取りも直さずイエスの生き方が、常に弱くさせられている人と共にあったこと、そういう人たちが作り出されていく社会の構造と人間のあり方を常に問い直してきたことを見ればキリスト者として果たしていくべきことが明確になるだろうと考えている。

宗教または宗教性という大きなテーマで、自分の考えをまとめるのに時間がかかってしまったが、もうちょっとイエスの生き方にこだわってみたいと考えている。

「宗教本能」について

鶴岡 瑛

ドストイェフスキというと、もう過去の作家になっているようですが、彼は晩年に宗教的な救いについて真剣に探求していたようです。次に『カラマーゾフの兄弟』における〈大審問官〉の挿話のごく一部を、おぼろな記憶と古いメモをたよりに紹介してみます。

中世のセヴィリアの市でいまでも百人もの異端者を焼き殺した怖ろしい枢機卿の老人が（再臨した）イエスを捕らえて牢に入れ、「今ごろ何しに現れた」となじります。「お前はへ人はパンのみで生きるものではない」といって、奇跡を起こすことを拒否した。奇跡を起こしパン（物質的満足）を与えることで、自分に従わせるのではなく、人が自由な意志で自分の教えに従うことを求めた。「しかしパンを断念して、お前に従えるのはごくわずかの強い人々だけだ」「人間は自由が好きなくせに、〈選択の自由〉という重荷には耐えられないのだ。お前が人間に信ずるものを選ぶ自由を与えたために、彼らは混乱し、自分の神が正しいと主張し合い互いに殺し合った。お前のしたことは誤

りであり、愛の薄い行為であった。」と断罪します。そして「われわれ教会は、大多数の弱い民衆の代わり、その重荷を背負って、彼らを赤子のように無知で幸福な状態に置いたために、お前と手を切って、悪魔と手を結んだのだ」「早くここから去らなければお前も火荊に処する。今お前の再来に熱狂している民衆が、明日は私の命令のままに争ってお前を焼くための薪を積むだろう」と宣言します。

この中には宗教を考える時避けて通れない、永遠のテーマがぎっしり詰め込まれています。宗教を考えてゆくと、結局救済とは何かという問題に帰着します。救済には、ここで「天上のパン」という言葉で示される魂の救済と「地上のパン」と言われる物質的な充足の二面性があり、どちらを優先するかで宗教の性格も変わってきます。

大雑把に現在の仏教に当てはめて云えば、既成仏教界では、魂の救済（さとり）を建前として、社会問題に目をつむっている、あるいは儀式の執行者の役割に逃げている面もあるようです。それに対して新興宗教では後者を売り物にして人を引きつけ、日常生活面にわかりやすく保守的な道徳―規制を持ち込んで定着を計っているものが多いように思う。

私は善―悪が神によってきっちり決められていたり、

ある特定の食べ物（たとえば牛、豚など）の禁止とか屠殺の仕方によって同じ食べ物が清浄―不浄になったりと、宗教ががちり信徒の日常生活を支配・規制しているような宗教は息苦しくて、仏教のような規範のゆるい教えに惹かれます。その分社会に及ぼす影響力は弱いかもしれませんが。

そうしたものが一致しなければならぬとする教えは、違反する者に対して不寛容にならざるを得ません。たとえば断食の日と決められているのに物を食べたり、飲酒が禁じられているのに、酒を飲めば不信心者のレッテルが貼られるでしょう。極端な例では中世のキリスト教社会における異端者への迫害などがあります。現在ではアフリカやアラビア半島の一部で行われている、女性性器切除の悪習に反対する人たちを、宗教的な権威者が「反イスラム」の名を被せて迫害することなどもあり、反イスラムと宣告された文学者の妻が、公に離婚を勧告されるという、現代の「踏み絵」のようなことも起こってきます。

生きる上での指針を宗教に求めることは、宗教本来のゆき方と思う。しかし細かい規制や禁止を宗教に求めるのはゆきすぎではないか。宗教は道徳を無視せよとは云わないが、ある場合には、社会が善とするものをも疑う冷静さ（知性）と勇氣を持つべきだと思う。

しかしこの老人（と作者）が主張するように、人間は自分で選択する自由の重さに耐えられないというのも真実だと思われる。それより組織や指導者個人、何らかの権威にゲタを預けて、そこに安住する方が簡単です。そこに個人崇拜の悪弊や、一般信徒の預かり知らぬところでの宗教集団の暴走も起こってくる。その場合信徒に責任はないのだろうか。

また「拝跪の全体性」と作者の云う、自分が正しいと思う神の前に「みんなも一緒に拝跪させたい」という欲求も大きな問題です。自分の信ずる神を選ぶ自由が、他に対しては自分の神の押しつけに変わってしまう。従わなければ、殺すことさえ善とされる。これこそ今世界中が悩まされている、宗教に発する争いを予言したものではありませんか。

さらにここには宗教組織と聖職者と個人の信仰の問題も取り上げられていると感ずる。この老人の一番の問題は、個人としての彼の「信じたいのに信じられぬ」という苦しみを、人類全体の問題にすり替え、優越者の立場から一般の信徒を管理しようとしている点です。自身の信仰が確立していないのに、神（仏）の権威を背負って、その言葉を受け売りする聖職者（僧侶）は、現在でもそこらじゅうに見掛けます。なぜ神（仏）と人との間にこうした仲介者を置かなければならないの

か、という疑問が当然生まれてきます。

真宗大谷派で学んでいた時、曾我量深の「人間とは宗教本能を持つ存在だ」という言葉を知りました。つまり食欲、睡眠欲、性欲という個体や種族維持に欠かれない基本的な欲求と並んで、宗教本能というものが人にはあるのだと云われるのです。本能というのはから、それは社会的存在としての人間が、後天的に獲得する「価値観」や「道徳」「倫理」というものより深く広く、人種や民族や国境を越えた、人間性にとつて普遍のものということになるでしょう。

この「宗教本能」というのは、仏教で云う「仏性」＝「仏陀の本性」、さとりそのものの性質、あるいは仏となる可能性の言い替えでしょうか。「皆共に救われん」を標榜する大乘仏教の歴史は、すべての人間が仏性を持つか否かという命題をめぐって展開してきました。しかし「仏性」というと、私たちの現実とあまりにかけ離れた感がありますし、仏教徒以外の人を排除する狭さがあるように感じます。その点本能という言葉には普遍性があります。また本能の現れ方は人によってさまざまですし、時として暴走する怖れもある点、宗教の持つ、一面としての「危険性」を想起させてくれるものでもあります。

私はある宇宙的な「真理」を体得し、「真理へ至る

道」としての教えを残されて歴史的な存在としての「釈尊」シツタル「ダ」は信じています。しかし後々造り上げられた、神秘―神格化された「釈迦仏」を文字どおり信じているわけではありません。またこの世界の、どこか途方もないかなたに、阿弥陀如来が実在し、浄土が実在しているとも思いません。しかし「釈尊」に現れたある「はたらき」を否定することはできません。イエスという歴史的存在に現れた、「はたらき」を否定することもできません。

人間はこのはたらきを感得する受信機のようなものを持っている、それを本能と云われたのかもしれない。絶対の愛と（人間には理解しがたい）非情さ、この絶対の両立しがたい二つが両立している関係を、言葉にすれば「即非」でしょうか。これも人間的な感覚の枠外にあるようです。人類に普遍的な「宗教本能」は、人類を含んでさらに宇宙的な広がりを持つものかもしれないと、私は夢想しております。

この本能を「広い意味での宗教性」とみなし、教理や組織を備えた「宗教」との問題を考えてみると、この「宗教」教団や宗派では、そうしたはたらきの根源を、実態のあるものごとく「仏（如来）」「神」などと名づけ、難解な教義や教理の中に囲い込みます。

釈尊の説法に参集した人々は、知識人である必要は

ありませんでした。心から心へ響き合う人間としての感覚と、真摯に求める心があればよかったです。イエスの場合もそうではなかったでしょうか。しかし教義や教理が複雑になれば、次にはそれを説明するための特異な用語や難しい注釈や専門家が必要となります。さらに科学や合理精神や物質文化の進化と共に、こうした教義が素朴な「宗教性」から離反して、頭腦的、観念的なものとなってきたのではないかと思います。もちろん同じ理由から、私たちの本能（感性）が純粋さを失っていることが、現在の（宗教的な）混迷の要因でもあるでしょう。

私は宗教組織の必要性を否定する者ではありません。宗教本能ですべてが片付くものでもなく、本能というものには誤りやすいものです。人間は何か依るべきもの―場所―仲間を持たずにいられない存在です。そしてまた知識―伝統を伝承する場も必要です。私自身宗教儀式の心を高揚させる感覚も好きなのです。しかし宗教組織といえども、人間の作ったものである以上純粋ではありません。かならず真でないものを含みます。また組織となるとどうしても自己保存の欲求が生まれます。そうした限界を持つものだというのを、まず宗教者に認識してもらいたいのです。批判もそうした観点に立つべきだと思います。

現在、仏教僧が知識人かどうかは別として、儀式、儀礼の専門家であることはたしかでしょう。葬儀や法事などの際には必要とされても、宗教的欲求（本能）を満たしてくれる存在としては求められていない、あるいは信じられていない現状があるように思います。オウムを引き起こした事件（の一因）を、そうした満たされない宗教的本能の暴走、と見ることもできるように思います。驚くべきことは彼らは既成仏教を（そもそも存在さえしないかのよう）徹底的に無視しています。こうした傾向は彼らだけのものではようか。今日本中にオカルトも含めた、さまざまな新興宗教が生まれ繁栄しているということは、日本の社会が、ある意味での宗教空白地帯だということではないでしょうか。

今この社会で日常的に起こっている、へ不要になった〜ペットが無造作に捨てられたり、子猫がビニール袋に入れてゴミ捨て場に出されたり、野生の動物や、学校や幼稚園などの飼育動物に残酷な仕打ちをすること。あまりにあっけなく命を断つ若者や子どもたち。衝動的に人を殺して死体をバラバラにしたり、焼いたり埋めたりする残酷な事件の続発も、私たちの社会全体、個々人の心情の中に進行している空白化の表れではないだろうか。

へ生きとし生けるものへに共通する命へのいとおしみ、哀れみ（共感、共苦）の感覚は、人間性の根源にあるもので、それらがなければへ人権へも言葉だけのものにならざるをえない。しかし教師や宗教者が言葉でへ命を大切にしなさいへと教えるだけでは、身につかないものです。社会全体のあり方が、肌身を通してそうした感性を養ってゆくものと考えます。宗教の役割もそこにある、というよりそれがへ宗教性へそのものと思われまます。

先のドストイェフスキの提出した問題に戻ってみます。彼は謎めいた形でこの対決を終わらせまます。老人の饒舌に対しイエスは終始沈黙を守ります。ある評者はこの沈黙をイエスの負けと解していますが、私は逆にこの沈黙と最後の接吻によって、イエスは老人の意に反して、彼に内にあるへ真なるものへを感受するへ宗教本能へを呼び覚ましたように感じまます。つまりへ信徒を統べる長への立場から、一個人に呼び戻したと思うのです。

この神を信じたいと願ひ、信じられない苦しみに陥っている老人に、作者の同様の苦しみや人間観が付託されていることはいうまでもありません。結局彼はロシアの民衆の持つている素朴な宗教心、それはロシアの大地がはぐくむ心情―感性というものかもしれませ

んが、にわずかに期待を寄せていったようです。彼自身は、この老人や（作中人物）イワンのように、頭脳（知性）の人であって、そうした民衆の一人ではなかったのですが。

私自身はむろん知識人ではなく、心情（感性）の人でありたいと思いますが、私たちのこの社会のどこに根を下ろすべき大地があり、どこに大地に根ざした〈民衆〉がいるのかという、絶望的な思いに時折かられます。オウムに惹かれる若者を含め、私たちすべてが根を失って浮遊しているのです。ここ数年ワラをもつかむ気持ちで、石牟礼道子さんの作品を読みふけていますが、しょせん私たちはああした共同体には戻れないし、石牟礼さん自身それらをすでに過去のものとして、あるいはへせめてこうあれかしとの祈りの上に創り上げられている世界のような気がしてなりません。

私の入信体験

佐々倉 靖

私は、この間のシンポジウムの時入会させていただいた者ですが、機関誌に載せる論文として「マリア信心を核とした嘗ての宗教改革を完成させる意味でのキリスト者としての日々の生き方」と題する論文を書いたのですが、固過ぎる、もっと自分の経験を中心としたものに書き直してくれと会の代表の方に言われました。

私の書いた論文は決して経験と無関係の単なる思考力の産物に過ぎぬものではありません。私の思索的研究は、すべて青年期に始まった人間に於ける精神的なものと同質的なものとの相克、矛盾対立から生まれた懐疑的懊悩の最中（さなか）から生まれてきたものです。ですから、私がどのようにして信仰心を持つようになったかという私の入信体験を語ったとしてもそれはただ私と同じ体験を味わった方の共感を買うだけでそれ以上の何ものでもありません。私達の人生は、いわば迷路の中を彷徨っているようなもので、その迷路からの脱出の一つのあり方として今私達の前に揭示さ

れている現代の総ての思想、宗教類はあるに過ぎません。そしてそれらのものが真理そのものを揭示するものである限り、我々はそれによってもうそれ以上のものがあり得ない最高、最大の幸福の状態に達しうるわけであり、それは又同時に最近翻訳された其の論文の表題としての、正に「歴史の終末」に到達したことをそれは意味しているのではないでしょうか。

私達が先に申したようにただ自己の体験を語り合うだけであり、少しもそれを契機として「それでは一体信仰とは何なのか、本来のありうべき信仰とは何なのか」ということをお互いに考え合わなかったならば、それは単なる相互に暖め合う自慰的なものに墮し、何ら人類全体の進歩に寄与するものがないのではないでしようか。此の会に入っている方々は、勿論相互の暖め合いのみを求めて入会なさった方もおられるとは思いますが、ただそれだけのものであるなら、それは単なる社交的サロンと何ら変わらないわけであり、少なくとも此の会に入った方達の理想とすべきものではないかと思えます。私は、此の会が少なくとも人類の発展に寄与するすばらしい未来性に富んだ会であることを願っています。とすれば、単に自己の体験をレポーターするばかりでなく、それらの体験を契機として一歩踏み込みそこにあるほんとのもの、本来あるべきもの

を自分で探求し、その結果をお互いに確かめ合う会であつてもらいたいと私は考えます。然し、体験したもののの中から、そこにある事実を掴み出すのはなかなか至難の業で他人の掴みだしたものを参考にして自己が経験の中から掴み取ったものを理解するように双方が利用し合つてこそ始めて我々のような会は意味あるものになつてくるのではないのでしょうか。

然し、今回は、会の代表の方の希望もありますので余り私としては乗り気ではないのですが、私の入信の経過、状況というものについてご報告させていただきたいと思ひます。

この様なことを話すには、私の本来の意味での人生の出発点に当たる中学校時代にまで遡らねばより正確な私の入信経験を語ったことにはならないと思うのですが、しかしこのような紙上ではどうてい不可能であり、ただそれらに關しては簡単に語るに止めたいと思ひます。

私は現在七一才ですから、私の中学時代は正に戦前、然し未だアメリカとの戦争が勃発しないその直前の時期でした。私が最初に申し上げた青年期初期の内部体験、つまり精神的なものと物質的なものとの内部対立

を味わったのは、私が一六才頃でした。ま一般的な言い方をすれば、あの藤村操が徹頭の翰として残した言葉と同じように（現在ではこのことを知る人は非常に希になったと思うが、彼は明治時代、一高生の時、人生これ不可解というような言葉を認めた手紙を岩の上に残して華嚴の滝に飛び込んだ人物で戦前いわば人生に懷疑する青年の代名詞のようにも思われていた有名な人物でした）自分は何のために生きているのだ、生きるという言葉に何の意味があるのかというようなことに煩悶を感じ、自ら文学とか、哲学にそこからの脱出を求めて青年期特有の彷徨課程に突入し、戦争体験、戦後のどん底の生活体験を経ながら私の内部には、文学的なもの、哲学的なもの、果ては科学的なものが育ち、形成されていったのです。そして様々の苦難を舐めながら、私の内部にヒューマニズム的なものが完成されようとしていた頃、（その時私は、もう既に三九才になっていました）私は思いがけないことを体験しました。私はその頃中学校の教師をしておりましたが、昭和三九年の暮れに以前私が大変世話になった校長が亡くなり、その印象が未だ消えやらぬ明る年の正月五日に不思議な夢を見ました。このような不思議な夢にはそれ以来、後にも先にもお目にかかったことがありませんが（勿論今これを見ている皆さんにしてもそ

のような経験はなかったと思いますが）明け方近く、私は夢の中で電話のベルが鳴る音にはっと目が醒めました（勿論、電話のベルの音に目が醒めたのは夢の中です）今でもはつきり覚えていますが、目が醒めると受話器の載った机が目の前にあり、そのベルがりんりん鳴っているのです。受話器を取ると何と遂先だつて死んだ筈の校長の声が聞こえて来るではありませんか。「佐々倉君。君は間もなくこないだ死んだ一男さんと同じように死ぬよ」一男さんというのは私の母の妹の息子で去年癌で死んだばかりなのです（尤も後で聞いた話によると、彼が死んだのは実際は癌ではなかったようだ）

かかってきた当の相手が先だつて死んだばかりの校長でもあるし、何か生々しい切羽つまった感じがし、イヤな感じがしたが、二、三日経つうち、すっかり忘れるともなく忘れてしまいました。それから何日か経って、正月の一五日、私の家では毎年そうするのですが、最後まで残ったかちかちのおそなえを碎いて雑煮にしてみんなで食べたのです。ところが今まで経験したことがない異常なことが起こったのです。食べた固いお餅が胸の途中でつかえ痛むのです。然し、こんなこともあるだろうと強いてなんでもないと自ら思いこもうとしたのですが、それから以後ずっと食べる度

にその箇所が痛むのです。当然私は、あの正月五日に見た夢のことがまざまざと想い出され、あの夢はこのことを予め知らせる夢のお告げに類したものではないかと思ひこまざるをえなくなつてしまつたのです。

私は、早速家にある医学書を引っぱり出して読んでみると、食事して物を食べる度に途中胸のあたりで痛むのは一応食道癌の疑いがあると考えられるから早めに医者に診てもらえと書いてありました。私は、もう医者に診てもらうまでもなく此の段階で完全に食道癌だと信じるようになりました。去年の校長の死に続いて起こつた正月五日の夢、又それに続いて正月の一五日に起こつたあの固い餅を食つた時の出来事・・・私にはもうどうしてもその時、それらのことを繋ぎ合わせて考え癌だと信じざるをえなかつたのです。然し、勿論私が如何にそのように確信したとしても、一応は病院へ行つて確かめねばなりません。そこで早速病院へ行き、現在の症状を話すと、直ぐにレントゲン検査をすることになり、一週間後の予約を取つて帰宅しました。そのときの私の心境を有り体に言えば一週間後のレントゲン検査を待つまでもなく、自分が癌にかかつていることを全く信じて疑いませんでした。そうなるも当然私は手術を受けねばならない。食道癌の手術は肋骨を切つて食道の悪い所を切り取らねばならな

い。直ぐ側に心臓があるし、非常に危険な手術なんだろうな、然も当時の私は非常な不眠症に悩まされ、精神安定剤を飲まなければ眠れない状態にあつたため、食道を取つてしまつた後果たしてその薬を飲めるのだろうか・・・後から後からと悪い不吉な考えが私を襲つてくる。

要するに今から考えてみると私は、そのとき不可避免的に死に直面せざるを得ないような局面に有無を言わず追ひ込まれてしまつていたのだ。

間もなく私を襲うであろうと考えられる死を目前にして、私の頭は益々研ぎ澄まされ、やがては死に行く自己を目前にして私は、もうこの世ともお別れだなど思った。実際私はやがては去らねばならぬ此の地球という物を眼下に見下ろしているような気持ちになり、その地球上で今後もし生き残つて様々な楽しさを味わうであろう友達のことを考え、畜生と腹が立つてならなかつた。そして私はかくまでも此の地上に愛着し、此の地上から離れ難く感じていた自分をこの時ほど哀れに感じられたことはなかつた。又それと共にこの自分までこの地球と共に消滅していくのだと思つと、もう居ても立つてもいらぬ気持ちになつた。正に絶体絶命、この窮地に追ひ込まれながらも、自らの力でそこから脱出することは絶対不可能なのだ。私はこの時の

状況というものに（これは後から命名したのであるが）、絶対的危機と名づけた。人はこの様な絶対的に逃れ難き境地に追い込まれながらもお且つそこから逃れることを希う。一体これ程惨めなことがあるだろうか。こうなったら人間は恥も外聞もない。もう必死になって「助けてくれ」と助けを呼ぶ以外如何なる手だてとて残されていないのだ。このような境地に追い込まれたら、哲学も、芸術も、科学も何の役にもたちははしない。このような時だ！人間が神の存在を感じるのは・・・人間が危機というものの際会し、然も如何なる手だてとて全く残されて無いという完全な自己の無力を感じた時、かかる無としての自己を感じることを通して始めて人は絶対者の、つまり神学的な言葉を使えば全知全能の神の存在を感じることが出来るのだ。然もそれと同時に自己が神の前にあるべからざる神への叛逆者、つまり罪人、神によって死刑囚として罰せられねばならぬものとしての自己の恐るべき運命に直面せしめられるのだ。然もどうだろう。この様に罪人である我等を罰し給う神が又同時に我々の罪を許し、救い給うものとして我等の前に愛の手を差し伸べる神であることを我等は同時に感じさせられるのだ。もうそうなることと私達を隔てる籬は取り払われ、私達は私達の直ぐ側に立たれる神の息吹を感じ、私達はそのありがたさ

に止めどなく後から後から涙は頬を伝わり、然もまるで赤子が泣くように何時までも何時までも私達のしゃくりあげる嗚咽（おえつ）は止まない。こんな時われわれはあの聖書の放蕩息子の喩えの話を想い出すのではなからうか。

少し長くなりましたが、私が如何なる状況の下に入信したかについて語りました。果たして私の語ったことが少しでも諸姉のお役にたちえたでしょうか。

私は思う。この頃。いつも

千葉悦子

何年も前のことだ。『バツシヨン・ダモール』という映画（仏・伊）を観た事があった。そのプロローグに、ほんの端役で登場する貴婦人がいて―主人公である青年将校と不倫関係という設定―その貴婦人がこう独白するシーンがあった。

「不倫とは美しい行為です。何故ならば神への忠誠を犠牲にしてまで相手に身を捧げるものだから」

当時、日本のテレビドラマの世界は安っぽい“不倫もの”であふれていたっけ。で、日本の脚本家たちの中にそんなセリフの書ける人が一人でもいただろうか？
これは一例。

また一例。私はミステリーが好きだ。かつては日本の恐怖映画もよく観た。横溝正史ブームの頃、横溝映画も数多く作られたが、そのテーマたるや血族のうらみによる殺人事件や財産をめぐる殺人など、どれもこれも底の浅いものばかり。外国の恐怖映画は『エクソシスト』（古いな！）からサイコスリラー『羊たちの沈黙』『セブン』まで、主題であるかないかは別にし

て神対人間、神対悪魔といった観念が創作の土台にあつて、内容の深いものが多い。またクリエーター達の日常の物事や現象への注意力の確かさも日本のクリエーターには欠けているものだ。出来上がる作品の奥行きはどうしたって違ってくる。

人間を超越する存在をどこかで意識する事なしに重厚な人間ドラマを作れる筈がない。それは言わずもがな。

昨日観たばかりの話題作『デッドマン・ウォーキング』は死刑囚とシスターとのかかわりを軸にまさに魂の領域にまで踏み込んだ映画だったが、猛暑の中わざわざ映画館に足を運んだのはその監督であるティム・ロピンスへの興味からで、というのには、以前彼の主演映画『ショーシャンクの空に』に何年も味わっていなかったような感銘を受けたからであり、『ショーシャンク・・・』の原作者はモダンホラーで有名なステイブン・キングだったのは驚きだが、彼を大衆小説家とあなどる事なかれー『黙秘』という作品ではフェミニズムがいつも問題にしているテーマをそれと明言せずに提示しているのであつて、『黙秘』の中の女性達は・・・ああ、言い出したらとりとめのない。それにひきかえ、現代日本の映画界は！文学界は！

さて、それで一体？一体私はここで何を書こうとし

ているの？

直接的には昨年の北京会議を契機に私個人の内部で変化した事がある。それはおそらく多くの参加者とは逆の方向で。つまり、主義主張の為にアクションをおこすというのは私本来のやり方ではないという事を了解したのだ。帰国後、私は苦勞して一〇〇枚の小説を書いた。そしてある出版社に投稿した。今また一つの物語をつむぎ始めている。主義主張で相手の心に平安を与える事はできない。私はそう思っている。読む人の魂が安らぐような、できることならそのような小説を書いてみたい。かさかさにひびわれたこの日本に生きながら。

一生書き続けても空しい努力に終わるかも知れない。日の目を見るかどうかは神のみぞ知る事。私は平凡に、淡々と書き続けることだろう。

この文章はそんな私のささやかな決意表明であります。

人間への目ざめ

中 村 精 子

” 死刑囚もライ患者も共に神の受け入れ給う人である。世間から見れば人間の限界に生きる人に生存の価値を認める考えなくしては我が国の憲法に規定する基本的人權の保障も受けとめる事が出来ない“（藤田若雄・「東京通信」四号）

私は点訳奉仕に携わって十五年余り過ぎたその中で視覚障害を持つ方々とのつき合いが始まり、見えない世界の不自由さを身に沁みる思いで味わっている。見えないのも「個性」ですと、前向きに明るく生きている人もいる。しかし見えない故に家族に物も言えず忍従を強いられギリギリの限界の中で生きている人も今なお多い。

粟津キヨは「私は目が見えないことを不幸だとは思ったことはありません。でも世の中は目あきの人のためにつくられています・・・」と。

ここで明治から昭和に生き抜いた盲女性、斉藤百合について書いてみたい。

斉藤百合に学ぶ

『光に向かって咲け―斉藤百合の生涯―』粟津キヨ著（岩波新書）

この著書は一九八六年出版され毎日出版文化賞を受けている。

斉藤百合は一八九一（明二三）年 野口小づる（斉藤百合）として愛知県豊橋の在である野口波太郎、きくの二女として誕生。一九四七（昭二二）年 五五才で死去。三才の頃はしが原因で失明。親は仕事柄方々に百合を連れてわたり歩き、岐阜の訓盲院の前で森巻耳院長に招き入れられ、そこで新しい人生が始まる（十才）。森院長によってキリスト教徒となる。キリスト者として盲人の文化の向上、教育の必要を訴え続け、「陽光会」事業を設立。盲女性自立のため、気概にあふれ活動した人である。その当時は小さな規模でも今日の福祉センターの萌芽をすべて備え影響を与えている。今日も著者の粟津キヨが学校時代に始めた「失明女子を考える会」と共に地道な活動が続けられている。

女按摩と呼ばれて

当時、盲女性は結婚は諦めなければならぬ時代であった。しかし百合は弱視の理解ある夫と家庭を築き

四人の子に恵まれ幸せであった。”女按摩“と呼ばれた当時の女性の仕事はどんなに悲惨なものであったか。誘惑と危険が常につきまとった。誰が父親か分からなく身ごもらせられ母親になるケースの人が沢山いたと言われる。今で言う慰安婦的存在であったであろう。

百合が初めての子の誕生を二ヶ月に控えたある日、一人の男に「按摩さん、それ誰の子だえ？何処で拾ったんだえ？」とからかわれた時のショック。胸をさされるような苦しみを味わった。”盲人レベルをもっと上げなければならぬ・・・”と。

弱視の夫は当時としては珍しい理解のある人で病院でマツサージ師として働いて経済的にも精神的にも百合の杖となり、虫めがねで新聞を読んで聞かせ、社会に目ざめさせてくれた人である。

東京女子大学入学

大正七年春、夫は新聞に発表された東京女子大学設立の記事を見つけ読んでくれた。設立の意図として、”今までのような家政科ではなく、又教員養成でもなく、キリスト教精神により、女性一人一人を人間として伸ばすための商業教育を行う“（傍線筆者）と言う意味の事が書かれていた。百合は「これこそ私の求めていた学校だ、そして私の住む世界だ」と際限ない夢

をふくらませていた。当時は未だ盲青年の大学入試も認められていなかった。まして百合は盲女性、主婦、幼児を持つ二十八才の母親でもあった。百合は夫の励ましで挑戦した。その時の面接官（学長代理）は「こは勉学の意気に燃えているお嬢さんたちの集まる処です。結婚しているめくらの女が大きなお腹にでもなつたらどうしますか」と尋ねた。

こんな言い方をされるとは思わなかったが百合は、「盲女子の置かれてある社会的地位が如何に低いか、それを高めるために、一人でも二人でも高等教育を受けたい、いや受けなければならぬのです」、言いたい事をしゃべるだけしゃべって帰って来た。

それから一週間後、大学から”特別生として入学を許可する“と通知が届いた。あきらめていた百合は声をあげて泣いた。これは障害者に理解を持つ新渡戸稲造（学長）ライシャワー理事の配慮が窺われたと言う。百合の在学期間は一九一六（大・七）年から一九二三（大・一二）年九月の関東大震災まで五年半、大震災で通えなくなり英文科修了を半年後にひかえ退学。諦めきれない出来事であった。

「陽光会」事業

斉藤百合のめざした「盲女子高等学園」の設立は様

々な事情で挫折したが、ライフワークとなった一九三五（昭・一〇）年設立の「陽光会ホーム」は様々な問題を抱えつつも四〇名あまりの盲女性の学び舎となり又憩いの場、時には隠れ家として利用され、『点字俱樂部』の発行で、社会への目が開かれ始めた基礎になった。そこでは勉強、生活技術、三療（ハリ・灸・アロマ）、聖書講義等に力を注いだ。

それから十五年戦争の波をもろにかぶり施設は障害者にとって真に不利な厳しい時代となる。国は弱者、障害者を先ず切り捨てる。訴えても最後の砦まで微塵に碎かれた。

しかし百合の目ざした「陽光会事業」への着想、展望、精神は今日の盲人福祉の様々な分野に受け継がれている。

著者 粟津キヨについて

粟津キヨは上越市の隣町の出身で四才で失明。九才で高田盲学校へ入学。卒業後百合の提唱する「盲女子学園」に賛同し、向学心に燃え上京。しかし学園は応募者がなく、当初はキヨ一人だけ。別の形で「陽光会ホーム」に学び、百合の感化で東京女子大学へ進む。当時では珍しく、新聞にも報道された。女子大の二十六才の時百合の孫に合う。

キヨの得た何より大きいものは目に見えない女として、社会に対応していく心構えと、人間としての誇りを持って生きていく魂を育てられた事。キリスト教の信仰を得た事であった。後結婚し、郷里の高田盲学校に二十五年在職。二人の子に恵まれる。今は亡き人となる。

付記

百合の三女美和は劇団民芸のベテラン女優。今年記録映画「鏡のない家に光りあふれく斉藤百合の生涯」が完成されたと言う。

フェミニズムと

協同組合運動（生協）

金子 珠 理

生協の組合員の圧倒的多数は女性、しかも三十代四十代の専業主婦である。性別役割分業を自然に自明なこととして担い、その延長線上で生協の共同購入を利

用している「時間と経済的には比較的余裕のある」家庭の主婦たちである。私自身も、スーパーに比べて完全に環境に優しい商品を購入できるのと、また宅配の便利さもあって、ここ五年ほど共同購入を利用し各種の会合にも参加してきたが、いまだにその雰囲気になじめないでいる。生協には様々なしがらみはあるものの、一応ネットワーク型の集団であり、宗教に比すればゆるやかな集団であると言えなくもないが、フェミニズムの視点で両者をながめたときに、共通の現象が見えてくる。

金井淑子が指摘しているように、協同組合運動とフェミニズムとの間にある問題には三つの側面がある（『フェミニズム問題の転換』勁草書房）。第一に、組合員女性の「主婦意識」の問題、第二に、職員と組合員、職員と組織理事の関係における男性主導や組合員の問題、されに第三には、この中で働く女性職員の女性労働者という立場での職場問題である。ここでは第一と第二の点について私の経験から考えてみたい。

今もって、生協の運動は「女性による運動」であるにもかかわらず、「女の（ための）運動」となりえていないのではなからうか。日本の生協運動は、六十年代に始まる高度経済成長が生み出した様々な社会的諸

問題（公害や食品添加物や農業汚染など）に対応して拡大してきたが、同時にその高度経済成長によって完成された「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業システムによって生み出された「専業主婦」を組織することで発展してきた。この専業主婦を男性の専従職員がオルグすることで巨大化したのである。原則的には、生協は組合員主導を宗としているが、組合員のほとんどが女性であるにもかかわらず、現在でも依然として男性主導型の、つまり専従職員主導型の運動であるという印象を受ける。もし家庭の主婦がフェミニズムに目覚めたならば、彼女らを組織してきた男性生協運動家は、運動目的を達成できなくなるためか、これまで生協においてフェミニズムは、問題とならなかった。「寝た子を起こすな」だったのである。もともと組合員の中には、地域委員や理事をしながら、環境・福祉・平和等において様々な提案を行う、いわゆる「活動女性」と呼ばれる女性も存在する。だが彼女らとて、所詮は夫に養われている専業主婦であり、生活的な自立は果たせているものの経済的自立にはあまり関心が無く、その活動も男性運動家の指導の下に行われているように私には感じられる。ポスト産業社会の新しい働き方として、ワーカーズ・コレクティブという試みもあるが、これもまだパート勤務の域を越えて

いないのが現状である。

一方、見方を変えれば、彼女らが「産業の論理」に代わり「生活者の論理」にもとづいて食糧問題や環境問題や福祉問題などに積極的に取り組んできたことは、効率一辺倒で人間を疎外し、持続不可能な負荷を環境に与え環境を破壊してきた男中心の産業社会に意義申し立てをし、オルタナティブな社会を作り出すという点で、その目指すものはフェミニズムと合通じるかもしれない。上野千鶴子が言うように、「生協はフェミニズムではない。然し、生協は限りなく近い潜在的可能性を持っている。したがって生協とフェミニズムは共闘できる。闘い方は違うけれどもゴールは一緒」である（生活クラブ生協主催の一九八九年のシンポジウム「生協運動とフェミニズム」での発言）。しかし「生活者」やエコロジーという理念の下では、男女の性差は包摂され、性差別問題は主題化されにくいのである。

それでも近年、生活クラブ生協などでは、フェミニズムの視点を取り入れようという試みがさかんになされている（佐藤慶幸編著『女性達の生活ネットワーク』文真堂、同『女性たちの生活者運動』マルジュ社、などを参照）。だが私の属する、ならコープの現状はと言えば、同じ生協とは言え、生活クラブ生協のような

取り組みはいまだ認められない。地域のゴミ事情のひどさ故に、居てもたってもいらなくなって、私も生協のリサイクルグループに属して、回収したトレイや牛乳パックの仕分けをしたり、環境問題の講演会に出かけたりもした。しかし、政府の諮問委員会とも関係のある、その講演会の女性講師の話しぶりには失望させられたそれは、「みなさんは良いお母さんになるために、リサイクルをすすめていきましよう」という類の論調で、それだけで私は気分を害してしまったのだが、もっとゾツとしたのは、その話を聞いていた会場の女性たちの熱気であった。講師の話に何の疑念も抱いていないのである。リサイクル自体は大切な行為であるが、またもや女性が無償でリサイクル役割を担わせられ、それも良妻賢母を引き合いに出して女性講師が鼓舞するのは！また、環境問題の学習会にしても、組合員の自主性というよりは、男性職員が敷いたプログラムに沿って行われているように思われる。それはちょうど、PTA（正確に言うとMTA）の諸活動が、学校側にある。事は環境問題に限らない。私が最近心配しているのは、福祉の分野への生協の取り組みである。たしかに高齢者や産後の家庭への簡単な家事サービスの提供は急務であるが、それが組合員の有志たちによって、

ただでさえ安いパートの平均的な時給の約半額でなされているのである。組合員（女性）同士の「たすけあい」の名のもとになされるこういった殆どボランティア的な行為は、応急措置としてはよいが、長い目でみれば、福祉サービス業の低賃金化・非専門化を引き起こし、女性の経済的自立が軽視されてしまうのではないか。そして何よりもそれは、やはり福祉は女性が無償でやるものだという観念を強化してしまうことにながりがかねないのである。

男社会で働くのも地獄であるが、かといって家庭に入って孤独のうちに子育てをするのも地獄である。何らかの組織に属さずして生きていくのは、我々凡人にはたやすくはない。子育て後の再就職先もパートしかないとなれば、そしてその場合、経済的にさほど困らないのであれば、生協や宗教団体といった組織に生きがいを求める人も少なくないわけである。だが我々は、その組織の持つ理念がどの方向に向いているかを常に反省しつつ、理念とかがわっていきたいものである。宗教団体につきものの福祉活動も、手放して歓迎される傾向にあるが、それが女性のため、さらには男女、人類のためにどういう意味をもつのか見極めていく必要がある。一種の宗教とも言える生協を通して、逆に宗教のあり方を考えさせられた次第である。

美しい椿円・夫婦別姓

新井れい子

選択的夫婦別姓制度などを盛り込んだ民法改正案の、先の国会への提出が、論議を読んだ末に、結局、見送られた。自党内で「別姓」への賛否両論が激突して、結論が出せなかったためだという。夫婦別姓が法制化されると、既婚者でも一年以内に届け出れば別姓になれるということだったので、早速実行しようと思っていた私は、苛立ちながら成り行きを見守っていたのだが、失望させられた。

法制審議会民法部会が六年かけて見当してきた「民法の一部を改正する法律要綱案」の内容の要旨は、①夫婦は婚姻の際、同姓（夫か妻の姓）を名乗るか、別姓（それぞれの婚姻前の姓）を名乗るかを選択する。②非嫡出子の相続分が嫡出子の半分となっているのを同等とする。③五年以上別居している夫婦の離婚を認める。④女性の再婚禁止期間を現行の六ヶ月から百日に短縮する。⑤婚姻最低年齢を男性一八歳、女性一六歳から男女とも一八歳にする。などで、今年二月に答申、法務省は三月中に閣議決定、国会提出の段取りの

苦だった。

ところが、反対論が、特に「夫婦別姓」に集中して猛然と沸き起こった。その主な理由は、「家族の一体感がなくなる」「別姓論の背景にある個人主義が家族をバラバラにし、社会を混乱させる」「離婚や婚外子が増える」などで、ある反対派議員の作った小冊子には「妻や母が夫や子供に見せる『没我の愛』という徳が、わが国の伝統的な家族像の中に厳然と生き続けてきた。夫婦別姓は日本文化に根づく家族を解体し、先祖の墓の継承や老人介護に重大な影響をもたらす」と主張しているという。一応賛成派の中にも「別姓に賛成すると、保守的な農村部で票を減らさないか」と心配する議員もいるというから、なるほど、政治家にはなにごとく選挙区事情というものがつきまとうのだなと、憮然とさせられる。

家族や社会の枠組みの基本にかかわる制度の改正だから、賛成、反対のさまざまな意見が出るのは当然であり、充分論議は尽くされるべきである。しかし、これらの反対論の中に感じとれるのは、戦後の日本社会が築き上げてきた「個人の尊重」「男女平等」の理念や考え方を否定しかねない、時代錯誤的な家族観である。夫婦別姓の導入が、ただちに家庭崩壊、社会の混乱につながるというのも、あまりに短絡的な考え方で

はないだろうか。夫婦別姓は「選択」を前提としている。「選択」ということは、いろいろな考え方、生き方の多様性を認めるということである。選択の自由、多様性を認めない社会は健全で文化的な社会とはいえない。「妻や母が夫や子供に見せる『没我の愛』という徳」という言葉には、男本位の古い価値観の復活を図ろうとする本音さえ窺える。母の子に対する没我の愛は、動物にも見られる本能的なものだから自然だとしても、夫が妻にも『没我の愛』を当然のように要求するというのは、男の尊大・傲慢ではないだろうか。そんな男たちに、どれだけ女たちが苦しんできたことか。男女の間の『没我の愛』は自発的なものであればこそ美しいかもしれないが、決して要求するものでも、されるものでもない。結婚したら同じ姓を名乗るという制度は、昔からあったわけではない。鎌倉時代の北条政子、室町時代の日野富子など、別姓だったことはよく知られている。明治以前は姓さえも一部の階級にだけ許されるものだった。明治四年（一八七一年）に町民や農民など一般庶民も姓を持つことを許されて、戸籍法が制定されたが、妻の姓は「婦女人二嫁スルモ尚所生ノ氏ヲ用ユ可キ事」と太政官指令は定めている。つまり夫婦別姓で、これがしばらくの間続いたのである。福沢諭吉は「日本婦人論」の中で、「双方婚姻の

権利は平等であるから、木村と山田が結婚したら両方から一つずつ取って、木山とか、村田とか名乗ればいい」などと、柔軟な考え方を示していた。変わったのは、明治三十一年（一八九八年）に施行された民法で「戸主及び家族ハ其家の氏ヲ称ス」「妻ハ婚姻ニ因リテ夫ノ家ニ入ル」と定められた。強固な「家」の制度である。

敗戦後、一九四七年、新憲法の施行で民法も改正された。民法七五〇条「夫婦の氏」で「夫婦は、婚姻の際に定めるところに従い、夫又は妻の氏を称する」とあり、法律上は同姓であれば夫と妻のどちらの姓を選んでもかまわないことになっているが、実際は九七%以上の夫婦が夫の姓を名乗っている。当然の社会通念化しているのが現状である。

世論調査によると、女性の中にも夫婦別姓を肯定している人が半数近くいる。大恋愛の末結婚した場合や一人の男をライバルと争って勝利者になった場合などは特に、同姓を名乗るようになった当初は、よろこびと満足感を覚えるだろう。また、酒乱の父親と意地悪な継母のいる実家から早く逃げ出したがっていた私の知り合いの女性は、結婚して新しい姓名になったことを、実家から解放された新しい人生の出発だと明るい顔で語っていた。夫婦別姓の場合、子供の姓をどうす

るかという大きな問題がある。その煩わしさを考えると同姓の方がやはり無難と思う人も多いかもしれない。社会的、経済的に自立しているエリート女性、結婚後も仕事を続けていきたいと思っている意欲的な女性、人の姓名は単なる符号ではなくて、自分のアイデンティティーの根幹に関わるものだと考えている女性などは、別姓支持派だろう。仕事を持っている女性が結婚して姓が変わることによって蒙る、いろいろな不便、不利がある。愛する相手との結婚でも、自分の姓を捨てることに抵抗を感じる女性もいるだろう。別姓を望む女性はまだ少数派かもしれないが、女性の各分野への社会進出が定着して、価値観、女性の生き方も多様化している時代なのだから、別姓選択制は時宜に適ったものではないだろうか。

私の文学の師であり人生の師でもあった中国文学者の故駒田信二先生は、老荘思想と戦場体験から体得した、柔和で勁い人生観、死生観の持ち主だった。小説を書くときも、生き方でも、垂直でなく水平、単眼思考でなく複眼思考をしなさい、と常に指導された。複眼ということは、中心が二つある楕円。夫婦の関係も、同心円ではなくて、中心が二つある美しい楕円。そういう関係が理想ではないかと私は考えるのだが。私個人のことで言えば、専業主婦に飽き足らずものか

きなどしていても、それで社会的、経済的に自立しているわけでもないという中途半端な存在でありながら、私が姓にこだわるのは、一つには旧姓への愛着と、二つには、ものかきのはしくれである以上、だれその奥さんではなくて、精神的には自立した一人の人間でありたいと思っっているからである。私の旧姓は「芳ヶ野（ほうがの）玲子」であるが、「芳ヶ野」というのは、鹿児島県の最北、熊本県との県境に近い山間部の地名である。この地名は全国に一つしかないし、ここに芳ヶ野姓の家は戸しかないので、日本でただ一つの姓ということになるのだが、そんな希少価値よりなにより私は「芳ヶ野玲子」という姓名が、字面も語感も気に入っていた。「玲子」は中国語で発音すると「リNZ」で、仲間うちでの私の愛称になっている。三十三歳で結婚したとき、それまで親しんだ姓が変わるのは自分のアイデンティティーがゆらぐような気がして嫌だったので、入籍をずる延ばし、アパートの表札は旧姓のまま夫の名前と二つ並べて出していた。親たちにせつつかれて二年後には入籍して「新井玲子」となったが、短歌や小説を書くときのペンネームは「山野玲子」とした。「山野」は私の生まれた町の名である。ペンネームなど使って小説など書く妻は、うつつとうしいらしい夫は、「新井様方山野玲子様」と書

いた郵便物がくると、わざと「こんな人、うちにいないよね」などと言っていた。

ところが、小説の同人誌の仲間に姓名学を研究している人がいて、「山野玲子」は大凶の名前だと教えてくれた。ついでに「新井玲子」も「破兆があり、家族の縁もうすく、親子の死別、夫婦の離別等、孤独煩悶に見舞われる。労多く得ること少なく追われるような人生で、自らを束縛し苦しめる運」だという。これには、なるほど、やはり、と思いついた。「芳ヶ野玲子」はというと、「才智豊かで、財運に恵まれ、大志大業を達成する、大吉の名前」だという。私は嬉しくなって、早速ペンネームを「芳ヶ野玲子」に変えた。夫にも堂々と言いつつので、郵便受けにも「芳ヶ野玲子」の名前を出した。新井様方がなくてもちゃんど郵便は配達される。鹿児島の方ではもちろん、東京でも文学仲間内では「芳ヶ野さん」で通っている。「新井玲子」は「新井れい子」にすると、「困難を乗り越え、目的を達成し、晩年安泰の人生となる」というので、日常は専ら「新井れい子」を使っている。「Womanspirit」に書くときもペンネームを使うかどうか考えたのだが、これは作品というよりも、現実の、フェミニズムの立場での発言だからと思って、あえて「新井れい子」で書いている。

以上のように使い分けているわけだから、それでよさそうなものだけど、私が法的にも別姓になりたいと思うのは、実家の管理上のことがあるからである。鹿児島の実家に財産というほどのものではないが、山林田畑、家屋敷が残っていて、長女の私が納税管理人になっていく。納税、不動産の賃貸や田畑の耕作契約など、いろいろな書類上の手続きに「新井玲子」と署名捺印するのに、相手方の、古い意識の抜けきらない田舎の人たちも、私自身も、なんとなく抵抗を感じるのである。

次の国会で民法改正案はどういう展開になるのか、廃案になるおそれもあるのではないかという憶測もあり、注目して見守っていききたいところである。

幼ママなんて大キライ（上）

岡村 聡 子

一 はじめに

今年の四月、私は二十日程入院した。診療科は精神

科。過去に精神科でソーシャルワーカーとして働いていた私が、だ。症状は抑うつ状態（時に躁転もした）。原因は一年半にわたる幼稚園ママ達（私は彼女達のことを幼ママと呼ぶ）からの有形無形のバッシング。現在も通院加療中で服薬している。退院から四ヶ月を経ている。ようやく最近生きる力が甦ってきているのを感じている。どうしてこういうことになってしまったのか。今でもあの頃のことを思い出すと怒りや悔しさ、悲しさがこみあげてきて手がふるえてしまう程なのだが、現代の女性（ここでは専業主婦）が置かれている立場故に象徴的に私にバッシングが集中したような気がしてならないので、できるだけ対象化しながら「何故？」を私なりに考えてみたいと思う。私自身の魂が書くことによつて癒されることを念じながら。

二 幼稚園というところ

今から五年前、上の子の幼稚園を選ぶ時には「いい幼稚園」を求めて人並みに悩んだ。そして結局家から近くもあり私の母校でもあるQ幼稚園を選んだ。プロテスタントの学校で、幼稚園、小学校まで男女共学（といっても男子は少ない）。中、高は女子校である。保育料も地域の他の幼稚園に比べると二割ほど高く、いわゆる「熱心な」母親が多いのが特徴だ。私は当時

の主任に心酔した。実に直截にものを言うベテランで、オーブンスクールで彼女の話聞き、この人なら信頼出来るかと直観しここに決めたのだ。しかし母親同士の関係が難しいらしいという話は入園前に友人から聞いていたので、上の子のときはなるべく関わりにならないよう敬遠しながら送迎していた。下に第二子もおり、ひとりっ子の母親のようにおしゃべりしているヒマもない。上の子が年長の時に第三子を妊娠、出産したこともあり、この二年間は何とか大過なくすごせたのだ。

三 ことの始まり

ことが起こったのは第二子の男の子が入園してからだ。乳飲み子をかかえてはいたが、アツという間に親しいお友達が何人もできた。上の子の時はナントナクつまらなかつたという不全感もあり、また幼稚園に慣れたということもあり、お互いの家を行き来するほど母子共に親しくなるのにさして時間はかからなかった。Aさんとはことに親しくなった。遅い子持ちで病弱なひとり息子をかわいがる彼女の心情は共感できるものであり、必死に彼を育てる彼女の姿勢は幼ママとして模範的だった。息子同士も大変な仲良しだった。タイプは全く違うのだがお互いに魅かれ合っているの

がよくわかった。Bさんも男の子ひとりのママ、さっぱりした性格の気持ちのいい人に見えた。Cさんはわが家と同じ家族構成で、早くに子どもを産み始めたこともあり（おまけに母校の先輩で家もご近所である）、子育ての先輩としていろいろアドバイスしてもらったりするなどよい相談相手と思っていた。

私自身は第三子が生まれた頃から地元のエイズのボランティア団体でエイズに関する学習会に参加したり、また子どもの性教育とエイズを考える母親グループを組織し活動を始めていた。非活動専業主婦から活動専業主婦へ変貌していった時期にあたる。

入園して半年たった頃、私が企画した初めてのイベントを実行するためにAさんBさんCさんに手伝いを頼んだことがあった。彼女達は細かく気をくばり協力してくれて、そのお陰でイベントは成功した。が、その頃からだ。どうも今までは違う雰囲気を感じ始めたのは。幼稚園が終わる時間は早い（ことにQ幼稚園は他の幼稚園のどこよりも早い降園時間だった）。一時三十分にはもうお迎えだ。子どもは当然遊び足りなくて、「まだ遊ぶ」と言い張る。しかしきょうびの園児は忙しい。様々なお稽古事に加えてお受験を視野に入れてるAさん達としては尚更だった。息子は欲求不満でツマンナイと言いはじめようになった。

四 クリスマスパーティー事件

そんな時、決定的事件が起こった。クリスマススパルティー事件だ。要はクリスマス礼拝（この日だけは夕方から親子で登園する）の午前中、わがクラスだけで公園に集まってささやかな遊びの会をもとう、ということでも私もハイハイと同意した。しかし私が不用意に隣のクラスのお友達に声をかけてしまったことがAさんの逆鱗にふれてしまったのだ。実際クリスマススパルティーにかける彼女達のエネルギーには何か凄さがあった。車は誰と誰が何台出す。昼食の買い出しグループは何人。さながらそう、学園祭のノリ。女学生ならぬ「よい母の権化」が設定したパーティーの予定だったのだ。そしてその実質的な責任者がAさんだったのである。私はマズツタ！と思ひ、早速Aさんに謝りの電話を入れた。ところが既に彼女は「私は別にいいの。誰を呼んでいただいても結構です。でも隣のクラスに声をかけていないのに一人だけその方がいらしたらどんな目で見られるのかしら。云々。」と剣もほろろ。翌日改めてAさんに謝ったが覆水盆に返らずだった。かくして大の仲良しだった子どもの関係までがズタズタに引き裂かれていく。その上何故か他の幼ママまでもが私を避けるようになっていった。幼稚園の帰りに近くの児童公園にクラスの十数人で車で連れだつて行

く時、必ずさそつてもらっていた息子がさそれなくなる。私が「ねえ、今日行くの？」と近づこうものなら、くもの子を散らすようにサートツいなくなる。私は当時は私が悪かった、と思つていた。ただ息子が巻きぞえになることが非常に苦しかった。「どうしてボクだけお友達と遊べないの？ママが遊ばせないようにしているんでしょ。ママのいじわる！」息子をなだめずかしながらも本当は私が泣きたかった。しかしある時、別の友人から「声かけられた時、マイで逃げるのに苦労したわ。」とくだんの幼ママたちが言つていたというのを聞いた時、はつきりと私がターゲツトにされていくことに気付いた。ここから私と息子との真に孤独な闘いが始まったのだ。

五 苦闘の日々

二年保育で年長に上がる時、私が全幅の信頼を寄せていた主任と担任が二人共退職された。新しい若い担任に今までの事情をかいつまんで話し注意して様子を見てほしい旨を話したが、「幼稚園では元気に遊んでいます。」この言葉には本当に落胆した。息子は放課後にお友達と遊べない（仲間はづれにされている）ため、週三回スイミングに通うことにし、「ボクはスイミングがあるから今日は遊べない。」と彼なりに辛い

合理化をしながら日をすごしていた。私は私で自分のサークルの活動にエネルギーを傾けながらも、酒量がふえ眠れない夜が続いた。サークルの活動が新聞で紹介されたり、地元のCATVに出演したりしたことも幼ママの神経を逆なでしたようだった。

遂に耐え難くなった私はある日Cさんに電話して相談した。お目出たくも私はCさんは私のことを理解してくれているとまだ信じ込んでいたのだった。Aさんとうまくいかない。誤りの手紙も書いたがなしのつづいで非常に辛い、と。するとAさんは「もう手紙を書くとかなんとかさういうことではなくて、要はあなたの在り方の問題なのではなくて？」エ！ナニソレ。

「私は一体どうすればいいの？」「答えはあなた自信のなかにあるはずよ。」つたつたってわかんないんだよお！ますます混乱した私は退職された元主任に電話をし、今までのいきさつを涙ながらに訴えた。「本当に母子共にかわいそうだったね。よく今までがまんしてきたね。」初めて私は肯定された。「あの人達とあなたはまだもう別の世界に生きているのよ。話し合いにはならないわ。後ろをふり向かず前だけを見て、あなたは自分の活動をどんどんやっていいのよ。新しいお友達をどんどん作ること。そして子どもには、人は変わるもので、ママは今お友達のママとけんかみたいいな

ことになっていいるから、だから君が遊べないんだよ、ということを書いてもいいと思うよ。」と元主任（この人は筋金入りのクリスチャンである）。言葉を選びながら私は息子にそのことを伝えた。小さな心で彼はどう感じたのか「フーン」と言っていたが、それ以降お友達と遊びたいと言って私をせめたてる言動は一切しなくなった。

この間私はアドラー派の子育てセミナー、フェミニストセラピーのCR（意識覚醒）やAT（自己主張トレーニング）に通いまくった。そして少しずつ私の身に起こっていることに気付いていった。幼ママは皆専業主婦で「良い母」を演じている。が、どこかで自らを抑圧しているのだ。そこに私のような抑圧の希薄な、やりたいことをやり言いたいことを言うヤツが現れた。始めのうちにはもの珍しかったのだろうが、そのうち私の存在自体が幼ママ達の存在を根底から脅かしはじめたのだろう。それが多分バッシングの理由だったのだろう。しかも彼女達にはほとんど悪意がない。何故なら彼女達は自分の正当性を疑ったことがないのだから。そして私と息子にどれ程の傷を負わせているのか、全く無自覚だったのだから。

今年は「フェミニズム・宗教・平和の会」の10周年に当たるので、初心に帰って、宗教あるいは宗教性について自由に書いていただいた。できれば、会員全員に書いていただきかったが、紙数の関係もあるので、30人弱の方々にお願ひし原稿をお寄せくださった方々のものを収録した。

10年は一つの区切りでもあるので、この機会に会のあり方を考えてみたい。これまでは例会の設定（内容の決定や発題者への依頼）、Womanspiritの編集（テーマ設定から原稿依頼まで）と発送、会計などの仕事は、小松さんの協力を得ながらであるが、ほとんど私が一人でやってきた。しかし、一人の力でできることは限られているので、新しい活動を展開することはほとんど不可能だし、せっかく入会されてもきちんとフォローできない（そのため、期待はずれで退会された方も多いと思う）。それに、一人の間が何もかもを抱え込むのは会を閉鎖的なものにしてしまうと思う。Womanspiritに関しても、なるべく多くの方の声が反映できるようにつくってきたつもりだが、編集を一人で

やっている、自ずから一つのカラーがでてしまう。

そこで提案なのだが、Womanspiritだけでも、編集委員会のようなものをつくって共同編集体制にし、番号おきに交代するというシステムにしてはどうだろうか。前号の21号は、明記されていなかったが、鶴岡さんと小澤さんがテーマ設定から原稿依頼まで全面的に編集をやってくださったので、いつもとは違った雰囲気のものになったと思う。

いずれにしろ、どなたかが申し出てくださらなければ新しいシステムにはならないわけだから、積極的な応答を待ちたい。他にも、なにか提案があれば、ぜひお寄せください。

なお、今回一緒にお送りする名簿は（シンポジウムに参加された方にはその時お渡ししました）、せっかく多様なメンバーがいるのに、お互いを知らないのは惜しいということで、新入会員の千葉さんが発案し、一人で作成してくださいました。活用してください。

1996年の年会費（3000円）がまだの方は振込用紙を同封しますのでよろしくお願ひします。

（奥田 暁子）

Womanspirit No.22

一九九六年九月発行

発行 フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒180 武蔵野市関前五―五―二五

奥田方

T/F 〇四二二(五三) 八七四六

郵便振替 〇〇一七〇―九―八〇三一

定価 六〇〇円

印刷 (有)オクノプリント社